RAILWAY PHOTOGRAPHY & POETRY CONTEST 2022

鉄道写真詩コンテスト入賞作品集

写真と詩で伝える鉄道の魅力

PRIZE by ecotran

国土交通省鉄道局長賞

「つぶやき」　佐々木博光（青森県）

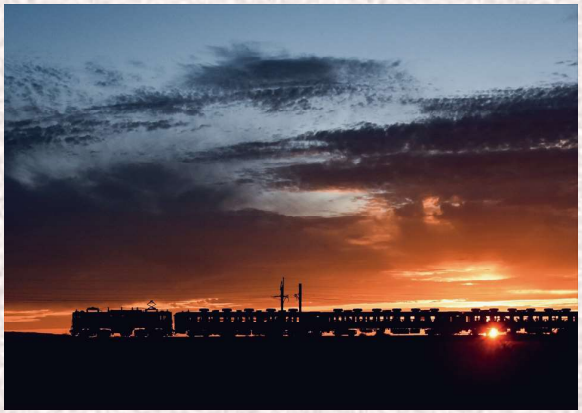
津軽の春は忙し
雪消えれば
すんぐ冬支度だね
せん定したりんごの木集めで
切って積んでおぐのせ
貴重な冬の燃料だぁ
これは昔っから　じさまの仕事だね
ガタガタン　ゴトゴトン
ガタガタン　ゴトゴトン
おー、ありゃあ十時の津鉄だな
どーれ　一服つけるがぁ

津軽鉄道 毘沙門・嘉瀬

鉄　博　賞

「水墨画」　難波秀織（東京都）

夕暮れ時の八郎潟
ふと空見ると
誰かが書いた水墨画
自然の中にもバンクシーか？
そう思いながらボーっとしてると
遠くの方から警笛一声
急行津軽が駆け抜けていく。



JR奥羽線 井川さくら・羽後飯塚

鉄道写真詩とは

鉄道写真詩とは、「鉄道写真」に「詩」を組み合わせて鉄道の魅力や旅情を表現する芸術活動です。
いつもの鉄道、旅先での鉄道、その時々にとらえた鉄道の表情とともに作者の心情が伝わってきます。

エコトラン賞

丸山朋夫　（神奈川県）

「電車でトリップ、小さな散歩」

赤い電車でやって来た
足の向くままこの神社
今日はここから休日散歩
どんな発見あるのかな
鳥居を見上げ石段昇る
ガタンゴトン
ガタンゴトン
高鳴る鼓動に電車もエール

京浜急行　神奈川新町駅付近

エコトラン賞

成田美香　（東京都）

「どこかに」

この街で働いているって言ってたよね
このどこかにいるんだよね
まだ仕事しているのかな
電車に乗っているのかな
私の視界の中にいるはずなのに
見つけられないなんて
近くに来たら寄ってよって言ってたのに
でも、同じ空気を今吸っているんだよね
それがちょっとうれしいな

JR東京駅

エコトラン賞

竹下雄惺　（東京都）

「夜の帳が下りる前に」

月よ
あなたの瞳は
人類が生まれる前から
この地球を見つめてきた
恐竜が絶滅する瞬間も
地震や津波や火山の爆発も
人類がロケットであなたに
足跡をつけたその時も
今人間は欲望によって
青い地球を破壊し
戦争を引き起こし
どこへ向かうのか誰もわからない
月よ
今の地球はどう見えますか？
僕は今日もあなたを見上げます
大好きな鉄道と平和な未来を信じて

京阪電鉄 龍谷大前深草駅付近

講　評

◇　米屋こうじ　Yoneya Koji
鉄道写真家

コロナによる制限がほぼ解除され、様々な場所へ出かける自由が戻りました。久しぶりの旅に出かけている方も多いのではないでしょうか。鉄道は日常の輸送手段でありながら、遠くへ運んでくれる旅情のある乗り物。開業から150年間続く「鉄道の旅情」も実感して欲しいと思います。そう考えると、鉄道を捉えた鉄道写真は、すでに詩的な要素を持ち合わせているものと思いますが、これに詩を加えるのが本コンテストの特徴です。第6回目の今年は優れた写真が多く寄せられた印象が残りました。

そのなかから私が選んだ作品は永松千菜美さんの「旅先セレンディピティ」。この作品を見ると、写真は絶景と呼ばれる場所や、特別なシーンを撮るだけが素晴らしいものではないと確信させてくれます。

朝の光線の実に清々しいこと。ハイキーな露出が全体をややわらかく支配しています。

また、見おろす階段がパースペクティブを構成し、消失点にある黄色い電車に視線が向かいます。加えてシンメトリーの構図が見る人に安心感を与え、旅先で出会った光景に対して味わった感動が伝わってきます。

日常的な光景でも旅先は特別なもの。詩のなかでは自身の日常から離れ、行く先々での出会いへの静かな高揚感が描かれています。偶然の出会いや、予期せぬ幸運を手にすることを表す"セレンディピティ"を、作者は旅のなかで授かったのでしょう。

◇　水無田気流　Minashita Kiriu
詩人・社会学者

今年で６回目を迎える写真詩コンテストは、自然の美しさと鉄道の組み合わせの妙が光る作品が目立ちました。コロナ禍の影響もあってか、にぎやかな場所よりも静謐さの感じられる風景が求められているのかもしれません。鉄道とともに映し出された人と人との関係性も、「変わりゆく未来」と「はかない今」を同時に目配りするような繊細な作品が目立ったのが印象的でした。考えたら、鉄道は人間を運ぶ営みの中で自然と人を媒介し、人と人を媒介し、個人の歴史の場面に定点観測のように登場するものですね。選出も写真の細部まで目をこらしつつ、詩の言葉の節々を読み返しながらの丹念な作業が必要となりました。

今回私が選出させていただいたのは、谷有紗さんの「抜錨」です。3連構成で2行・2行・3行の短く刈り込んだ言葉の選び方が、潔い印象を与えています。二文字熟語のタイトルは一見難しそうですが、雅語的でもありつつ近年ではボーカロイドの作品に使用されたりと、ポップな用法があるのもうなずけるような言葉選びとなっています。船出の錨を抜く直前のような、一瞬の躊躇を不可分なく切り取っており、その分読後に余白の抒情が深く残る作品となっていました。

「詠み鉄」の皆さま、今年も誠にありがとうございました。来年も、皆さまの作品を楽しみにお待ちしております。

Japan Network for Sustainable Transport and Environment
一般社団法人交通環境整備ネットワーク　ecotran JNSTE

エコトラン賞

千葉恵一　（宮城県）

「ひまわり畑」

ひまわりが
夏の陽射しで　笑ってる
黄色いじゅうたん　敷き詰めて
お日様向いて　笑ってる

もくもくと　入道雲も
湧いてくる

シュシュポポシュシュポポ
汽車が行く
ひまわり畑を　汽車が行く
笑顔いっぱい　汽車が行く
ひまわり畑を　汽車が行く

JR釜石線　平倉・足ケ瀬

エコトラン賞

竹下　朗　（島根県）

「私が運転手」

今日は　私が運転手
右よーし左よーし
前方よーし出発します

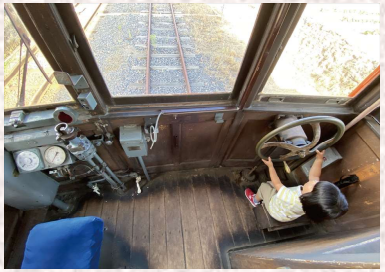
わたしが好きな　一畑電車
ガッタンゴットン　走ります
松江城を後にして　宍道湖沿いに走ります
羽を広げて　日光浴をするカワウ

ママの好きな　一畑電車
ガッタンゴットン　走ります
朝もやの中　ぽっかり浮かぶシジミ漁の小舟
夕焼けに染まる　水面

じいじの好きな　一畑電車
ガッタンゴットン　走ります
醤油の匂いが漂う　昔ながらの町並み
雲州平田　木綿街道

ばあばの好きな　一畑電車
ガッタンゴットン　走ります
たくさんの神様をお迎えする　大鳥居
いよいよ終点　出雲大社前

パパが好きな　一畑電車
ガッタンゴットン　停まります



一畑電車　出雲大社前駅

エコトラン賞

須永真弘　（埼玉県）

「自然と汽車」

木々が青く色づいた夏の日。
木漏れ日から日差しが顔を覗せ、
熱気を帯びた停車場に、
いつもの汽車が滑り込む。

「今日も来たね」と生物たちは言った。
「今日も暑くなったね」と汽車たちは言った。
互いに挨拶を交わし、車掌の点呼の声が響く。
程なくして汽車は停車場を後にした。

汽車が発車した停車場は
僅かに涼しくなっていた。
心地よい夏風を通し、
健気な蝉の声がこだましている。

小湊鉄道 上総大久保駅

エコトラン賞

小知和拓海　（神奈川県）

「時代と記憶」

ここは成れの果て
来てしまえばもう線路は走れない
そして人を運ぶことはもうない
期待され人を運ぶために作られた
雨の日、風の日、雪の日
どれだけ強かろうが走れと言われたら走る
その生活ももう終わり
世代交代は何にもツキモノで
古くなれば置き換わり進むにつれて
変化を求められる
時代は変わる
過去のものは消えていく
それは炎が消えていくように
ただ一つだけ残るものがある
過去の歴史が消せないように
存在したことが必ず残る
世のため人のために動いた一つの歴史
形が消えても
消せない記憶が思い出させてくれる

京浜急行　久里浜工場

エコトラン賞

坪井庄治　（東京都）

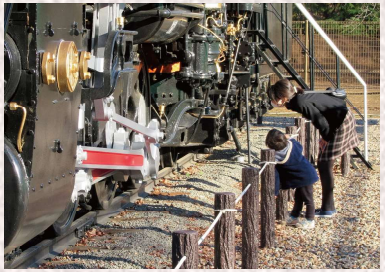
「公園の汽車」

ママ、この汽車動くの？
電池はどこにあるの？

車が手つないでいるね。
どうやって回るのかな。

ママ、これシュポッポなの？
でも、音がしないよ。

そうか、もうは走らないのか。
汽車って、大きいなぁ。



昭和公園（昭島市）

米屋こうじ賞

「旅先セレンディピティ」

永松千菜美　（福岡県）

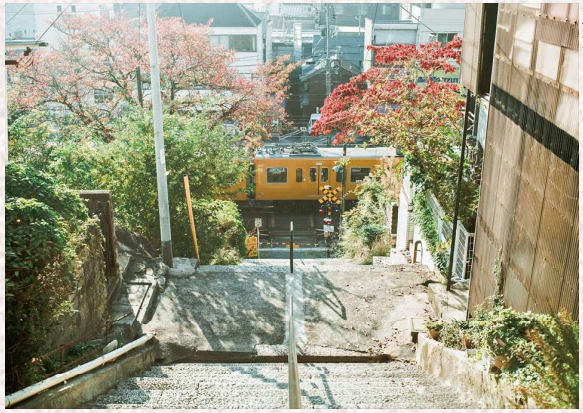
誰も知らない街に来た
いつもの起きぬけのコーヒーも
お出掛けのマストなお化粧も
今日は布団にそっと寝かせたまま
心の鼓動のままに宿を出た

見たことのない光
触れたことのない音
普段は聞こえない風

それらをまとめる色鮮やかな風景が
私の歩を進める

誰も知らない朝を曲がり
誰も知らない角を歩いた

私の相棒はそれからそっとつぶやく
旅先セレンディピティ



JR山陽線 尾道駅付近

水無田気流賞

「抜錨」

谷　有紗　（神奈川県）

君とあれほど乗った２０分発は
こんなにも速かっただろうか

最後に手を振り返す君の
スマホを握りしめていた右手には花束

電車は時間を乗せて発進
私は思い出を左手に握りしめたまま
錨を抜けないでいる

江ノ島電鉄 鎌倉高校前・七里ヶ浜

国土交通省鉄道局後援　　一般社団法人交通環境整備ネットワーク主催

鉄道写真詩コンテスト2022

ー 写真と詩で伝える鉄道の魅力 ー

協力：鉄道博物館・東武博物館・日本現代詩歌文学館

協賛：旅の手帖　・　交通新聞社　・　関東交通印刷

鉄道×文学の新しい表現に挑戦！　あなたの撮った鉄道写真にあなたの詩を添えて

「鉄道写真詩」は、「鉄道写真」に「詩」を組み合わせて鉄道の魅力やその旅情を表現する芸術活動です。
本コンテストは、その登竜門としての役割を担うもので2017年に第1回を開催し、
今回で6回目となります。作品は2022年7月1日から9月30日の間、ホームページの
応募フォームより受付を行いました。
多数のご応募をいただき、ありがとうございました。
本コンテストの作品及び過去の受賞作品は、ホームページでご覧いただけます。

https://ecotran.or.jp/photo/2022/